

# 冥土問答

石川希理

短編小説集 1

アクトス増刊号



冥土問答

石川希理

短編小説集

1

亡き妻に捧ぐ

目次

冥土問答 1

老残チヂミ券 19

うふふ 37

ジバサンビル 59

あとがき 67

解説 67

つれあい詩史 69



## 冥土問答

冥土問答

北野 義一さんどうもご無沙汰でんな。

義一 ああ、如来山の北野さん。

北野 よく来てくれましたな。

義一 ふわつとね。引つ張られる感じがして、気がついたら、目の前にあなたがいた。後ろには大日さんがいる。やはり仏さんの力ですか。大日如来というと、「万物を総該した無限宇宙の全一」という。

北野 やはり博学でんな。ばんぶつをそうがいた、なんたら全一ってなんのことですか。

義一 あなたは、このお寺のご住職なのに、知らんふりとは。

北野 いやいや、ほんまにわかりまへん。一応大学の佛教学部で、宇宙そのものと聞きましたし、勉強もしてきました。けど卒業してお寺を継いでからは、これと飲むのに忙しうて。(笑)

義一 女性と酒ですか。破戒坊主でしたな。

北野 義一さんは厳しいな。そのとおり、まあ日本全国総て破戒坊主でつせ。

義一 立派な方もおられますよ。

北野 まあ、そうでつけど。嫁さんも子どももおつて、お寺嗣いで、肉食べて酒飲む。

義一 あ、そうか。多くはどんなに高僧でも全部当てはまる。

北野 坊主の私がいうのも何でつけど。(笑)

義一 それが日本の仏教なんでしょう。

北野 それはそうと「万物を総該つて」なんですか。

義一 あ、宇宙にあるものは総て該当する、つまり大日如来は宇宙そのものという。

北野 あ、それでつか。だから偉い文学者は嫌いや、難しすぎる。(笑)

義一 すみません。ついねえ。

北野 それで向こうはどうですか。

義一 どういえばいいか。

北野 もつたいぐらんと。やはりハスの花が咲いて、妙なる調べがあつて、天女がいて。

義一 そりや、極楽でしょう。あなたのお寺は真言密教で人はだれでもこの身このままで仏になることができるのではないですか。

北野 理屈はねえ、そうですけど。死んだら何になるか、例えば靈魂について實際はどの宗派も統一見解というものがほとんど明文化されてまへん。さつきの肉食妻帯みたいに、曖昧模糊としてまんな。日本人は白黒をはつきりつけまへんので、まあなんとなく。

義一 なんとなくですか。そうするとあなたのこころの呼びかけで現れた私は。

北野 そうでんなあ。姿は見えますけど、はつきりしまへんな。いや感じるだけ、声が聞こえる感じだけかも知

れまへん。それより、向こうはどうでつか。

義一 まあ、天国でも極楽でもないですねえ。宇宙に溶け込んでいて、また生き返るのを待っている。でも意識も存在感もない。

北野 あらら。そしたらやっぱり帽子はいりましたな。

義一 帽子ですか。

北野 はい。そしたらトレードマークの帽子だけ浮かんでま。

義一 冥土にですね。

北野 つまり宇宙空間に帽子だけ浮かんでいて、その中に義一さんのいのちがある。

義一 北野和尚。あなたSF作家になれますよ。(笑)

北野 ありがとうございます。ありがとうございます。(笑)

布施 楽しそうですね。

義一 善逝寺の布施さん。こりゃあ驚いた。

北野 やっぱりでんな。布施さんも義一さんが感じられますねんね。

布施 ええ、見えますよお二人が。虚空の中で対座しておられる。義一さんは帽子も被っておられる。ダンドイですねえ。

北野 見えるんですか。

布施 そう見えればいいなあと。

北野 なんや願望かいな。(笑) 帽子だけが浮かんでいる辺りから聞いたつたな。(笑)

義一 偶然来られた。

北野 いえね。先ほど本堂で阿字観してましたら、義一さんが出てこられそうな気がしますのや。それでメー  
ルしといたんですわ。

義一 阿字観というと瞑想法。

北野 よくご存じで、まあ、禅の一種と考えてもろても。

布施 あ、そんな話ですか。

北野 いや、向こうのことを聞いていたんやけど、つい。

布施 まあ、瞑想が上手いくと、神様とか光が見えたりもしますけれど、難点は、終わったらまた世の中も  
自分もそのままですね。

北野 たまには劇的に目覚める人もいるかも知れまへんけど。

布施 それで向こうは。

北野 そうそう、向こうでんがな。

義一 何もないですねえ。永劫回帰の世界ですね。

北野 難し。

布施 何もないでしょうなあ。

北野 なんや知ってるんかいな。

布施 うちは善逝寺ですよ。お釈迦様の別名、善く逝くです。どこへかというところあの世、向こうへです。

北野 あ、そやった。わてところは如来。「タターガタ」から来てますな。「そのように行きし者」「修行完成者」を意味しまんな。漢訳して「如来」は、「人々の救済のためにかくのごとく来たりし者」という大乘仏教的な見解で、本来の仏教における語義とは乖離があるらしいでんな。

布施 凄い。

北野 もうかなわんなあ。茶化さんという。うちの寺の意味も知らんかつたら困りますやろ。

義一 いや、面白かったですよ。でも向こうはなにもないですね。意識も存在感もなにもない。こうして呼び出されてみてなんとなくわかるんですよ。

布施 極楽でも地獄でもない。

北野 あんたなあ。義一さんが地獄にはいかんやろ。

布施 こりゃあしつれい。

北野 なにもないいうて、実際は冥土放送局の『イレブンPM』に出てたりして。(笑)

義一 あれば面白いですねえ。でも何もない。

布施 そこ、どういふ場所なんですか。

義一 宇宙ですね。全存在。

北野 やっぱり大日さんや。

布施 すぐに宗旨に結びつける。

北野 すんまへん。

義一 いや、山川草木悉皆成仏という考えからすると当たらずとも遠からずでしょうか。

北野 大日さんやない。

義一 特定の実体、モノではないですね。宇宙といつても、今のこの銀河を含む大宇宙。それができたり滅んだりする無数の宇宙を含む世界ですね。

北野 あらら。凄い科学的でんな。

義一 我々の住む宇宙はビックバンで、その瞬間に時間も空間も生まれた。じゃあその前はというと虚数の時間があつただろうというのがホーキング博士ですね。

北野 あかん、頭が痛い。

布施 その無数というより、無限につづく、しかも振動し続ける宇宙があのだですか。

北野 さすが東大哲学科卒。

布施 茶化しなさんな。

義一 物理的な宇宙、この世界というのは、実は、いのちとして存在する宇宙を我々が認識している部分で

す。

布施 宇宙の本質というのは、いのちそのものですな。

義一 そうですね。星も、ブラックホールも素粒子も、そして岩石も総ていのちの現れ方の一つです。

北野 ちよつとまつて。するとでんな。岩も人間も同じ。

義一 いえ、業の結果による縁の現れ方で決まりますな。

北野 やつぱり因果応報や。

義一 因果応報というのは語感がよろしくないですねえ。「此縁生」という関係性でしょう。

北野 聞いたことがありますな。縁起ですな。

義一 ただ、時間的にも空間的にも驚くほど複雑です。

布施 次元的にもでしょう。

義一 そのとおりです。素晴らしい。

北野 なんのこっちゃい。えらいこっちゃい。

布施 ちゃちゃ入れなさんな。北野さんも仏教学を勉強してますからわかるでしょう。

北野 パチパチパチパチでんな。

義一 なんですかそれ。

北野 拍手です。口パチでんな。

布施 ひよつとすると般若湯が入っているのかも知れません。(笑)

北野 それはないでんな。では、次元的にも、を私が解釈しましょう。

布施 凄い。義一さん黙って聞きましょうか。

義一 いいですね。

北野 我々のでんな、認識はたかが知れてます。光りも音も臭いもほんの少ししかわかりません。科学の力を借りても少し広がるだけでんな。次元も縦横高さに時間を加えた四次元まで。ただこの次元、我々には認識できないだけでもっと多くありますな。十一次元までとかいわれる人もいます。時間が現れると時間の可逆性はないにしても、伸び縮みはありますな。次元もまた可塑性があり、人間に理解出来る範疇からはみ出てしまふ。それほどたくさんの世界が存在するということですね。

布施 凄い。

義一 凄いですねえ。そのとおり。それを「無常」ということで、或いは「此縁生」ということで悟られたのがお釈迦様です。

北野 えへん。で、なんですけど、我もないのに、なんで義一さんがおられるのか。

布施 無我ですねえ。お釈迦様は無常、無我、涅槃寂滅といわれたですからねえ。義一さんがいるのはねえ。

義一 私がいらないと因果も輪廻もないでしょう。

布施 あ、そうか主体がないのだっただね。

北野 不思議なこつちや。「不思議経」、「妙法」でんな。

布施 この点はどうか。無我なのに因果の法則や輪廻がある。「我」がないなら、原因もないし、輪廻もない。

義一 「無我」というのは、正確には「非我」でしょう。いのちというのは存在そのもの。そしてカルマという名の業を生み出していきます。それは岩であろうと草であろうと人間であろうと、もつと飛躍して空間や素粒子であろうと、長大な時間の中ではその振るまいが業を生み出していきます。特に真理を知ることのできる知的生命体の思考、こちらの動きは大きな業を生み出します。

布施 知的生命体は人間ですか。

義一 人間も含まれますし、別の世界や宇宙では、亀やワニ、木や草、また岩石。或いは液体やガス、高温のマグマのような知的生命体も生まれているかも知れませんね。星全体が一個の生命というようなお話もSFにはあります。とにかくそういう知的生命体を含む様々なものが縁によつて集まりモノとして実体化する。その一番複雑なものが知的生命体の一つの種類としての人間です。

布施 ロボットは生命体になれないですか。

義一 ころがないですからねえ。アーサー・C・クラークが描いたコンピュータ「ハル」。彼は機械のときに殺人を犯し、やがて超生命体によつて知的生命体に生まれなおすようです。機械的なコンピュータやロボットが、六十兆の細胞が集まり、ころを持つ人間に匹敵するには、百年単位ではない相当な時間が必要でしょうね。

今のままで人間そのものが二、三百年持つかどうか。

布施 そんな短くて滅びますか。

義一 もっと短いかも知れません。なにせ、人類誕生以来、知能は進んでもこちらの進化はゼロでしょう。それが核兵器とか原子力、そして途方もない工業力を持ち、グローバルな経済活動を始めている。自由放任とい、新自由主義といい、なんのことはない、コントロールができない自由なんです。欲望と既得権のかたまり。

布施 哀れな話ですねえ。

義一 あなたたち宗教家は残念ながら。

北野 よくわかつてま。肉食妻帯、既得権のかたまり。

布施 自虐的ですねえ。(笑)

義一 ともかく、いのちというのは縁によつて集まったもの。時間軸も空間軸も、次元軸も複雑に絡み合い、その中で揺らぎ生まれたものです。宇宙そのものが揺らぎ続いていくのちですので本質的なものです。義一という、そういう個体、かたまりが続くのではない。ただ縁による傾向性というはある。だから、それを義一と名付けてもいいのですが、そうすると不滅の固有の実体を持つと誤解を招きますね。魂と同じになつてしまう。もちろん人間としてではなくいのちの傾向性ですから、何に生まれるかわからない。また義一といういのちが続いているわけでもないから、意識も断絶する。でも、似たものが集まる。だから奥さんや子どもや友だちといったいのちは関係性、縁が深いから、慈しみあつていれば、また響き合つて同じようにところに生まれるでしょう。次

はバルタン星人の夫婦かも知れないですがね。

布施 バルタン星人ですか。

北野 ウルトラの星の方がいいでんなあ。ウルトラマン。(笑)

布施 あそこ「光りの国」というから、阿弥陀さんの国。極楽と同じですね。阿弥陀さんは無量光寿ですものね。

北野 布施さんはそちらに思考がいくんや。お坊さんやなあ。

布施 あなたもそうですよ。

北野 仕事はね、坊主ですけど、本質は…、トホホ…ですなあ。(笑)

布施 まあ、それは置いておくとして、我ではない、いのち。敢えていえば「非我の我」でしょうか。なんとなくわかります。

義一 「非我の我」なんていい言葉ですねえ。

布施 ありがとうございます。しかし、お釈迦様は、死後は知らないといわれている。

義一 それは「知らない」だから、あるかも知れないということでしょう。因果や縁起という思想からは、死後も想定できません。ただし、極めて形而上の考えになりますから、「知らない」といわれているのです。また、無常は悟っておられても、自分の代わりに人びとに説法した舍利弗が亡くなったときは、淋しく嘆かれています。人の情ですね。「無常だから、無我だから泣くな」ではないですね。とらわれすぎてはいけませんが、慈悲喜捨の

「悲」も大切なのです。また、お釈迦様の瞑想を研究されている地橋秀夫さんは、「死後があるかないか不明なら、あると考えて善く生きましょう」といわれている。これも正解ですね。

布施 そのとおりですね。いま私たちは義一さんにお会いしている。でも言葉遣いが丁寧ですね。

義一 そうですね。（笑）私も次の生に向かっているので、綺麗ないのちとして生きたいのです。関西弁はいいのですが、通じないことも多い。

北野 ま、そうでしょろな。

布施 しかし、いのちが自ら作った業によつて次の生が決まるとなると、なにをしたらいいのでしょうかね。

北野 なにせ、肉食妻帯の坊主でつから。一瞬一瞬、悪業を積んでいるようですよ。

布施 阿弥陀さんや大日さんの教えを説く。

北野 それは頓服だという話でしたな。死に瀕した人にとりあえず「安心しなさい」という頓服。名号や題号を唱えたら救われる。極楽にいける、安心させる。その上で、善い生き方を教えていく。というのも、死んだ人に教えられへんわなあ。

義一 できますよ。

北野 ど、どなして。

義一 いのちは縁による個であつて波動ですから、生きているものの善き生き方と、慈しむところが響いていきます。

北野 回向でつか。

義一 です。ね。結局、よりよき生き方をしないとダメなんです。

布施 生きているものがねえ。

北野 むつかしおまんなあ。

義一 そう難しくはないんですよ。考えてみればお釈迦様がそんなにできもしないことをいわれるわけがない。

北野 あ、そらそや。

義一 でも「自灯明」といつて、自分がしっかり努力しないとけない。

北野 それが難しい。(笑)

義一 座禅しろとか、滝に打たれろとかしなくていいんですよ。

北野 お経を唱える。写経をする。

義一 いえいえ。それが悪いとはいいませんし、した方がいいですよ。ただ縁というのは人間関係です。それを良くすればいい。

北野 人間関係は難しいでつせ。どなしたらええのか。

義一 「おはよう」「ありがとう」「助かったよ」「おつかれさま」をこころからいえばいいですよ。

北野 ええつ、それだけで善業でつか。それで成仏できまんのか。

布施 愛語、愛顔が布施の根本ですものね。

北野 布施はんが布施でつか。あ、すいまへん。ここはちゃちゃ入れたらあかんのや。

義一 いいですよ。(笑)さすがにご僧侶だけあつてよくご存じですね。優しい、慈しみに満ちた言葉。明るい笑顔。それだけで人間関係がよくなるでしょう。ここに安らぎが訪れるでしょう。憎しみや怒り、貪りのところがあるできませんものね。

布施 相手がそれにどのような反応を示そうとも、ひたすらここから慈しみの言葉と態度を示していくのですねえ。

義一 そのとおりです。言葉や態度だけでなく、野に咲く一輪の花を差し出してもいい。もちろん、お金があれば、それを困っている人に渡すのもいいですが、どんな人にもできるのが愛顔愛語、態度でしょうね。

北野 南無釈迦牟尼仏はあきまへんか。

義一 いいですよ。お釈迦様に帰依しますというのですから。ただし、その教えに帰依するのですから、「助けてくれ」ではダメですねえ。教えのとおりに慈しみのある生活を送らないとね。

北野 般若湯生活はダメですなあ。(笑)

義一 でしょうね。ただ、一般の人が守る五戒、殺すな、盗むな、嘘つくな、不倫するな、酒飲むのうち、酒飲むなは後から付け加わつたものだそうです。飲酒運転がダメなのは頭脳を麻痺させますからねえ。もつとも、これをいうと難儀なのですが、生活上はまず酩酊はいけなからはじめで、最後に飲まないようにすればいいの

ではないですか。

北野 助かった。それだけ覚えとこう。

布施 いまの本心でしょう。ダメですよ、それだけでは。(笑)

北野 結局、義一さん。冥土というのは、あれれ。

布施 帰られた。

北野 帽子忘れてまつせ。

布施 本当だ。帽子だけ浮かんでいる。

北野 いつの間に実体化したんやろ帽子。けど、その中におられたりして。(笑)

布施 では、我々も消えますか。

北野 ほんまでんな。お寺も大日さんも消えてもろて、わては虚空の如来山へ。

布施 私は善逝寺へ。

北野 面白かったですな。また会いましょう。今度は般若湯持つて。あ、義一さんはウイスキーでしたな。タバコもいる。

布施 チト、難儀ですが。執着し過ぎないなら、そういうことにこだわるより、善く生きることにこだわりたいですなあ。

北野 あ、真面目。わて反省しています。懺悔。

布施 それじゃあ私が帽子は届けましょう。  
北野 ありがとうございます。では。



了

表紙写真

或る日マンション六階の自宅から虹が見えた。二重である。珍しいので写真に撮った。それに満月の写真を合成した。[希]

老  
残  
千  
ぢ  
ミ  
券

老残チヂミ券

国道二号線と百七十五号線が交わる交差点の西南の角は狭い。台地状になった土地の斜面が道路際までせりだして歩道は幅が一メートルもない。長さは数メートルだが、人がすれ違ふのさえやつとで、自転車でもこようなものなら、歩道に入る手前でどちらかが待たねばならない。

中谷均は、前から来る自転車を見つけて、狭い部分に入る手前で立ち止まった。相手は白髪のお紳士という感じで、自転車も有名メーカーのものらしい。着ている薄手のブレーカーは乳白色でなにやらロゴも入っている。がつしりした体軀を左右に揺すりながら、悠然と自転車は進んでくる。

人は止まってもすぐに歩きだせるが、自転車はこぎだすのに力がある。それに歩道は少し中谷に向か

つて上りになっている。中谷はぼんやりと待っていた。午後四時過ぎの散歩である。六十八歳前から始めて七年になる。この散歩と野菜券のおかげだろう、身体にガタは来ているが日常生活に支障はない。介護を受けずに暮らせる健康寿命は男が七十一歳だから有り難いことだ。このまま平均寿命の八十八歳くらいまで生きてコロリと死ねたらそれでいい。先日、チヂミ券もマイナンバーカードにつけられたが、使う必要もなさそうである。

財布も携帯も持っている。コンビニでも覗いて、気に入った弁当でもあれば買うつもりだ。自宅には冷凍食品もあるし、インスタントの味噌汁やスープもたくさんある。ジャガイモに切干大根はいつもなっている。夕食に困るわけではないが、インスタントとはいえ作るのと、後の食器洗いが面倒である。久しぶりにビフカツでも買うかなあといいながら自転

車を見ていた。ふと不安になった。傲慢のランプブラック色の風が自転車の男性にまといついている。狭い道での譲り合いは、雨の日の「傘傾げ」と同じマナーだ。傘を傾けてすれ違う。起源が江戸時代という真偽はともかく、道の譲り合いは日本人のよき風習である。譲られた側は、相手に頭を下げたり、お礼をいう。

(まずいなあ……)

心の中に警告灯が点いた。科学的ではないが、なんとなく不遜な雰囲気伝わってくる。恐らく見た目やその動きが、中谷の経験から彼の情感にシグナルを送るのであろう。

被っているサファリハットを右手で少しなおした。ここで通り過ぎるのを待っていますよと、改めて伝えたくもりである。

自転車はゆつくりとベージュ色のズボンを上下さ

せつつ近づいてくる。相手を見つけてすれ違うまでほんの数秒、長くても十秒ほどのことに違いない。それが長い。刻の流れが渦を巻いている。中谷は心の中で足を踏んばった。

自転車は歩道の細い部分に入り、右手に立つて待つ中谷の左前に来た。男は悠然と胸を反らして、前を見ている。中谷は男の顔を見た。目がチラリと合った。男の皮膚は白い、

四角い大きな顔だ。

(やれやれ)

通り過ぎる手前から、失望感が押し寄せてくる。

案の定、男は頭も下げず、もちろん「どうも」とか「ありがとう」とか一言も発せず傲慢風とともに通り抜けていった。ベージュ色のズボンと有名メーカーの運動靴が不遜な笑いを落としていった気がした。(ま、こだわらない、こだわらない)

中谷は自分にいい聞かせた。そんなことで怒つたら自分の心が汚れるだけ疲れるだけである。相手は何も感じない。

退職以来、この手の高齢者がやたらと目につく。

にこやかで丁寧な人もいるのだが、十人中四人は、こちらが頭を下げてでも挨拶しても傲然と胸を張ってマンションの廊下を通り過ぎる。二百五十戸もあるから見知らぬ人が大部分だが、それにしても挨拶くらいしてもいいだろう。七年前に亡くなった妻にいうと、「耳の遠い人もいるかも」と笑われた。そりやあまあそういう人もいるかも知れないが、なるほど「心の耳」が聞こえない人が多いかも知れない。さらに「若い人にもいるわよ」と釘を刺された。

どうも歳が行くと、同年配ばかりが気になる。住んでいるマンションの地域とレベル、そういう不遜な男性の風体からして、会社の管理職くらいでやめ

た人が多い気がするが、情けない気がする。いつまでも現役時代の職階の優劣を引きずっている。恐らく管理職時代も嫌われていたに違いない。

これも中谷が心配したり怒つたりしても仕方がない。怒りは心をどす黒くする。相手がどうであれ、中谷は挨拶をするようにしていた。自分の心の問題であろう。

歩いて十分足らずのコンビニに着くと、弁当コーナーに行つた。この頃は高齢単身者向けの税込み三百五十円までの弁当が多いので助かる。量は五百円のもの三分の二足らずだが、それで充分なのだ。中谷はキャベツ主体の刻み野菜の百円パックも買った。これは二回に分けて食べる。

レジに行くと、野菜券を見せた。マイナンバーカードに含まれていて、二割引になる。また、これがないと酒やタバコや宝くじ、高額商品など娯楽嗜好

品、特定のものは買えないようにしてある。第二次の東京オリンピックの後、進む少子化と増大する高齢者に対応したものである。累積財政赤字は二千兆を超えていたし、年金は破綻しかかっていた。

「日本の国債は国内消化がほとんどで心配ない」とご専門家はいわれるが、「借金は借金やないか」と素人の中谷は思う。こういう素朴な疑問や感覚が事の本質を突いているのだ。高齢者が増えすぎているが、元気な高齢者も結構多い。だが働き口がない。そこで考えられたのが都会地に近い耕作放棄地の利用である。自民党の支持母体は農家だが、大部分の小規模などころはもう経済的にほとんど成り立たない。税金での補填は農家のモラルハザードを随分昔から起こしている。このままでは、平等で、愛すべき母国日本が成り立たなくなる。特に問題なのは、地価が上がり人口が集中している東京、大

阪などの巨大都市近郊以外は、地価が下落しているにもかかわらず零細農地が減らないことだ。第二次大戦後の農地解放で地主になったものが多いが、高度成長期に起きた土地は必ずあがる、土地ほど安定した資産はないという土地神話は根深いものがある。それに輪をかけているのが税制だ。農地ならば極めて安い税金であるから、狭い土地で税の補填がある高い米を作る。また土地の一部に小さな畑を作り、農地として誤魔化す。大部分は雑草地なのである。そこで健康な高齢者の住所地に近い土地を十坪から二十坪ずつ、借り上げて年一千万円で貸与することにした。土地の生命力は強い。十坪あれば、高齢者夫婦の食べる大根やトマトや茄子、キュウリ、ジャガイモ、にんじん、タマネギ、豆などの野菜類はほぼ自給できる。キャベツなどの葉もの類は作るのが難しいので購入するにしても

食糧自給率は跳ね上がる。その上、軽度の農作業は健康の維持にも繋がる。一方農家は雑草地に陥ることを恐れることなく、土地を手放す必要もなく地代が入る。こうして耕作を続ける高齢者にはマイナンバーカードに野菜券機能を持たせた。カードはそれ以外に交通機関の三割引利用や商品の購入、銀行預金への利子のプラス、スポーツジム、マッサージ、温泉施設、娯楽施設の利用、国内外への旅行に二割引で使えるようにした。マイナンバーカードには野菜券機能がついている印としてトマトマークがつけられている。

中谷はコンビニ袋を受け取ると、元来た道を引き返す。袋はゴミ箱用にとっているが、独り暮らしになつたらゴミ箱は一つでよくなつた。マンションのポストからタ刊を取り、帰宅したらシャワーを浴びる。風呂に湯を溜めることは減多にない。面倒である。

それから洗濯機を回す。独り暮らしなので夏場は三日に一回の洗濯でいい。新聞を読み、ネット配信された旧作映画かテレビを見ながら夕食にかか。食器は最少にして、ほとんどシンクの横に拭いて置いてある。二つある食器棚にはコーヒークップだけで十箇以上もあるが無用の長物だ。夫婦で子育てし暮らしてきた間に増えたものだ。いまはほとんど調理らしいことをしないので、大型の冷蔵庫は空気がかりだし、電磁調理器も使うことがなくなりつつある。役立っているのは電子レンジと、トースターと、昔買ったティファールの湯沸かし器だけだ。不要なものは子どもたちも持たずに持って行けというものの、子どもたちも一応のものは揃っている。だいいち、よほどいいものでも無い限り、このご時世、古いものは嫌だろう。それに好みも、使用頻度も違うことはわかつている。

（捨てるしかないが…）

ということも何度も考える。が、面倒でもあるし、捨ててしまおうと妻と過ごした想いでが碎かれて消えるように踏み切れない。部屋中のもものが積み重ねてきた人生の証でもある。

畑仕事は週に一度、二、三時間で足りる。健康でも屋外で土と格闘すると明くる日まで疲れは残るが、野菜の成長は楽しみである。あとは、新聞、小説を読んだり、高齢者クラブの催しにでかけたり、ネットサーフィンをしたりする。たまには友人と酒を飲んだりすることもある。中堅の商社マンだったので、経済ニュースが気になっていたが、それも退職後三年もしない間に興味が失せてしまった。

（認知症になるなあ）

と考えることもない。人の名前がでないで愕然としたのは四十代の半ばだ。いまはものの名前の失

念も日常茶飯事である。慣れというか諦めというのだろうか。つい前に買った品物の名前がでてこないでも平気になった。脳細胞は壊れるばかりで増えないという。シナプスという連結回路は年老いても増加すると聞いているので、読書は欠かさない。しかし、たぶんいまのところ日常生活には支障ないという軽度の認知症かも知れない。

社会活動や人間関係の高齢者クラブや友人との飲み会といったところで、たまの話である。食料品は三日に一度ほど近くのスーパーにでかけるが大した時間ではない。まかり間違うと一日中誰とも話をしない。それが何日か続くことさえある。実際、なんとなく考えるのが面倒で曜日を忘れることが多い。人ときあわないと、人やものの名前をほとんど忘れていく。思いだす努力をすると認知症の改善にはいいそうだ。しかし独り暮らしは無理しない

でもいいし、その必要もない。筋肉でも使わないとたちまち劣化、減少するが、頭の細胞も同じことである。アルツハイマーでも他の病気ででもないのだが細胞は壊れ、シナプスは増えず、物忘れは病的になっていく。

（まあ、それが楽かも知れない）

と思う。ただ、短期記憶は失うのにエピソード記憶という長期記憶はなくならないらしい。昔のいい思い出ならば良いのだが、嫌なことや嫌いな人のことほどよく思いだされる。案外似たような仲間が多いのではないだろうか。中谷はできるだけ嫌なことは考えない、忘れるようにしている。自分の心が疲れるだけだ。

誰からも期待されず、必要ともされない。もはや人生に成すべき事もない。生きる意味がないのである。若いということは可能性の世界に住むということ

とだ。ところが残りが少ないということは時間が短いということだけではない。可能性を実現する体力も金も社会的基盤も加速度的に失っていくのである。ただ虚しく生きるだけである。そうすると、一切の束縛から解放されて自分のいいエピソード記憶の中だけに生きる方がいいかもしれない。

（ニヒリズムの極致かな、ひよつとするとその世界が極楽かも知れない）

中谷均は薄笑いしつつ考える。介護保険が値上がりし、介護士が不足し、社会保障が破綻しそうになるわけだ。本来、子育てを終え生物としては去らねばならない人間が、社会的な価値もなく生きるのは不自然なのだ。

（ほんの七十年前、第二次大戦ごろまでは、寿命は五十歳過ぎであつたというなあ）

実際、大きな話だが人類誕生以来二十万年間

で三十歳くらいから五十歳にまで延びてきた寿命である。それが七十年で三十歳も延びたらとてもない変動が起こって当たり前なのだ。

年金は妻の加給年金がなくなつて月に十五万円である。そこから健康保険一万六千円、介護保険五千円や電話・電気・ガス・水道、携帯・ネット、マンションの管理・修善積み立て金、駐車場代など二万五千円を払うと、九万円ほど残る。税金は固定資産税に市県民税。月に割ると一万ほどか。新聞代と、毎月の糖尿病の診察、薬代とか歯医者とかを支払う。買うことはあまりなくなつた衣料費とかはいるが、食費と飲み代だけで、なんとか舞は回る。貯金は死ぬ間際の入院に八十万と葬祭費に七十万残してある。葬祭費は家族葬で僧侶は呼ばない。電気製品なども買い換えがあるだろうから、その分に三十万ほど用意した。まあマンションとはいえ

修理も必要で、毎月一万は残すように心がけている。

それから歳をとつて老衰なら、胃瘻も気管切開も、強心剤も、心臓マッサージもいらないと何度子どもたちに念押ししている。身体が不自由になつたり、認知症ならどうしようかと思つたがこれはチヂミ券の利用が始まつてホツとしている。

昔はマンションによく子や孫も来ていたが、中学生くらいからは減多に顔を見せなくなつた。考えてみれば長女も長男もこのマンションで生まれて育つたから、ここが故郷である。中谷自身も都市で生まれ育つてゐるから田舎はない。もともと都市やマンションは棄民の行くところで、根無し草である。まして子どもたちにとつては母親が亡くなつたいま、あまり訪ねる価値はない。父親に会つても面白くもないし、そうかといつて懐かしい海や山川も存在しない。

親戚や親しい知人もいない。田舎なら、肉親親族や知人、大きくなるまで一緒に育った連中がいるが、都会では、学校自体が大きくて、同学年だけで何百名もいるし、高校になるとバラバラになる。農地という経済的基盤がないサラリーマンは転職や転職も多い。人間関係は希薄だ。

長女夫婦は電車で一時間ほどの所にいるが、会うのは正月と命日と、盆くらいなものだ。春秋の彼岸はたいてい独りである。長男夫婦は名古屋にいて、もう三年ほど会っていない。たまに電話がある程度である。

今年の正月から、水道を使うと長女の所に連絡が行くというシステムをつけてくれた。もつとも、長女のところがいなくなったり、中谷が一日中家を空けるときは事前に連絡しておかねばならない。

妻が亡くなったときは、「一人で倒れたらどうし

ようもないな」と想像して心配したが、今はそれはそれで止む得ないし、考えないことにしている。心配しても仕方ないことをあれこれ妄想するのはよくない。

中谷はマイナンバーカードを取りだして眺めてみた。品物の購入とか施設の利用、旅行といったものの以外に、住所や戸籍の情報、金融機関の情報、JRや私鉄やバスはこのカードで高齢者割引も効く。免許証兼用でもあり、クレジット機能もある。大手ショッピングモールや、家電量販店、デパート、コンビニなどでも使える。カードは口座から自動的にチャージされて、残額が五万円を切らないようになっている。何から何までが一枚に集約されて、使い始めると暮らしに欠かせない。指紋認証システムと連動していて、セキュリティは飛躍的に高まっているが。（便利は結構だが…）

新たに付け加えられた小さなハートマークをゆ

つくりと見つめてみる。五ミリ四方ほどの心臓である。野菜券機能のトマトマークは、割り当てられた畑を実際に耕していると地元の民生委員の証明があればつけてくれた。だがこのハートマークは、徹底していた。民生委員とカウンセラーの訪問がまずあった。それから市の健康診断と、公証役場での登録がある。健康診断は無料で頭と身体のMRI検査までしてくれる。役場では公証人と医師と弁護士が質問を受けた。それに合格して申請すると、半年後にマークの交付を受けたが、効力の発行はその一年後である。中谷のマークは既に効力があるが、使うのはゆつくり考えてからである。

(チヂミ券か……)

考えたあげくに申請して、またまた考えている。読んで字の如く、このカードを持って指定医療

機関で「チヂミ治療」が受けられる。

歳を取ると身体は縮んでいく。椎間板や骨が摩耗して背が低くなる。目玉も縮む。目玉などは小さくなる時に、目玉を包む膜が上手く縮まず、網膜を引っ張って視力を落とすことがある。筋肉も萎縮する。足腰は鍛えることで維持もできるが、そうはいっても退行していく。頭の毛が白くなり薄くなり、細くなる。性器も例外ではない。もちろん個人差も大きいし、部位によつて差異もある。皮膚は緩み老人性紫斑が現れる。脳は細胞が既に若年から壊れ始めて増えることはない。ただ脳細胞をつなぐネットワークは高齢でも増加することが確認されている。だが、現状ではせいぜい最大数パーセントしか脳の仕組みはわかっていない。「脳トレ」などというがどうすればネットワークが確実に増えるのかはわからない。いろいろ試されてはいるものの認知症は

激増している。

ドアを開けて室内に踏み込み、袋を低い上がり  
がまちに置いた。その途端にサファリハットが頭から  
抜け落ちた。

（認知症になりつつあるな）

中谷はニヤリとした。どうやら頭蓋骨全体が縮  
みつつあるようだ。脳細胞が減るのだから中がスカ  
スカになった骨も薄く小さくなるに違いない。

帽子を拾い上げようとして、左腰がチクリと痛  
んだ。身体の劣化も急速に進みつつある。

認知症は、この苦勞の多い、意味のない人生から  
逃げるために用意された人体の仕掛けかも知れな  
い。

そしてチヂミ治療は「治療」という名前だが、人  
生の終末を早めるか、楽に迎えるかの「療法」であ  
る。

（一つは安楽死だが…）

中谷均は七十五歳で安楽死を実行しようと考え  
ていたことがある。もともと七年前に妻が逝った  
ときには、喪失感と無力感で「死にたい」と思った。

六十歳で退職して、二年間は囑託勤務だった。

現役時代と違い仕事への張りや情熱がなくなってい  
った。部下でもないし、責任もほとんど求められな  
い。そうすると疲れを覚え始めた。仕事や人間関係  
に關わることへの疲勞感である。六十歳からは急速  
に老化が進むと聞いたことがあるが、そのせいもあ  
るだろう。仕事を辞めると束の間の解放感があり、  
妻と旅行を楽しんだ。若いときから読みたいと思っ  
ていた小説も読んだ。

（白々しかったな…）

五時半になつてゐる。つけっぱなしにしているテレ  
ビを見ながら、コンビニ弁当をチンした。野菜は袋

からだして、ガラスの器に半分をとり、醤油をかけた。湯を沸かしてインスタント味噌汁を作った。インスタントといっても最近のものは味噌をとくから不味くはない。これで洗う物は味噌汁の碗と、ガラスの器と箸だけだ。ついでに冷蔵庫から缶ビールをとりだし、おかきも用意した。晩ご飯の後は、いつもこれだ。その後麦焼酎の水割りを飲みつつ、ネット配信で録りためたビデオを見るか、ニュース番組を見る。バカバカしいバラエティはもうたくさんだ。

(そう、なにもかもが白々しかった…)

読みたいと思っていた小説を読んだときだ。若い頃なら夢中になっていたものが、一向に面白くない。小説家の頭の中の作り物だという感じが強い。作家も歳を経ないと文章が上滑りする。

(昔は僕が若くて、作者が年長者だったものが逆転したからかな…)

苦笑いをする。映画などでも同じで、楽しめない自分に嫌になる。

(もう少し脚本に性格描写を入れて感情移入できるようにしろよ)とか(伏線をきちんと張って、ストーリーに膨らみを持たせろよ)とか、評論家のようになる。

友だちがいてたまにはゴルフもするしカラオケにも行くが、話題といえば健康のことか子や孫のことあるいは噂話である。輝くような好奇心は、何を見聞きしても薄汚れたガラスに囲まれていた。

結局、妻と旅をし、妻と散歩し買い物にでかけた。映画も政治の話題も妻が相手であつた。いつもそこにいて、邪魔にならず、心配りがあつて、適当な手応えもあつた。

(妻にとつて俺は大きな子どもだったろうな)  
ふっと淋しい影のような笑いが起こつた。

自分の好きなことをいろいろとして、それを妻に見つめてもらっていた。それがあつたから暮らしていたのかも知れなかった。

妻が亡くなると、生きている意味がなくなつた。

生きたいという内的衝動が消えているのに気がついた。何もすることがない。特別にやりたい、認められたいという気持ちも起きない。無理をして高齢者クラブに行つても、人間関係が鬱陶しい。まるで皮肉の効いたマンガのように、六十代前半でそんな集団に入ると「お、若い者が来た」と声がかかる。雑用が押しつけられる。

「わしは昭和一桁生まれだ」

「へえーっ、私は二桁ですよ」

歳の自慢が始まる。第二次大戦後までなら、平均寿命が五十歳前半であつた。人口の六割が農民で、高齢者は長老であり、その経験は讃えられた。

(歳など、いまは誰でもとる……)

とは口が裂けてもいえない。高齢者クラブではそれだけが誇れることなのだ。「お若いですね」「五歳年上なのに私よりお元氣そうだ」などと追従しないといけない。だから高齢者クラブで一人前の顔をするには七十歳以上が絶対条件である。

現役時代のことなど誰も自慢しない。自慢したら無視されるかうんざり顔をされる。そして誰も近づかない。だからそうしたい、そうするしか能のない男性の高齢者はすぐにでてなくなる。つまり高齢者クラブは正確には「女性高齢者クラブ」と化する。

老醜をさらして生きたくはない。助け合つて妻とともに老いさらばえるのならいい。人生の伴侶である。配偶者を英語でベターハーフという。だが半身を失えば人である意味がない。「未亡人」などとい

うのは、夫が亡くなつても殉死しない妻という差別用語だが、ある意味では正解ではないか。独身主義も、同性愛も認めるが、なんといつても人間の基本は夫婦なのだ。そうでないと人類は減んでしまう。(まあ、それほど大言壮語するつもりはないが……)勝手に妄想が膨らんで中谷はつるりと顔を撫でた。

死にたかつたが、死ねなかつた。勇気がなかつた。手段も本気で考えなかつた。自死などということをしたら、子どもや孫にまで累が及ぶかも知れないとも考えた。ただ怖いという感覚はなかつた気がする。結局そのままなんとなく生き続けた。本当に人生には何の意味もない。動物たちはただ生まれて、ただ生きて、子孫を残して自然のままに死んでいく。人間だけが言葉を操り、物事概念を獲得し、知識を伝え積み上げ、社会を拵えた。財産や地位

や名誉に執着した。愚かな話である。愚かさ果てしない貪りや怒りを生み、楽しかるべき生を飢餓感に満ちた苦痛に変えた。その社会から退職という制度で切り離されてみると、残っているのは妻だけだった。意味のない人生を二人で意味を創つて生きてきたのである。

七十五歳で安楽死なら、さほど子どもたちに迷惑をかけないであろうと考えていた。「チヂミ券」は安楽死券でもある。三人に一人が高齢者の社会。人類初の異次元に踏み込んだ日本で、安楽死が公然と制度化された。膨れ上がる社会保障費に日本は耐えられなくなった。のみならず社会の活力が削がれた。社会維持の観点から欧米に遅れていた安楽死制度は一気に先頭に躍りでた。

若い人には通常は認められない。原則七十五歳以上になれば「安楽死」を選択できる。肉親などの

同意は不可欠ではない。あくまで本人の意志が尊重された。

ただ、健常でありつつ死を選ぶ者は、そう多くはなかった。また、なかなか踏み切りがつかないうちに、安楽死の条件を逸脱してしまうケースもあった。

決意しても一年間は認められなかった。一年経つと考えが変わるからである。一年後にもそのままだと「旅立ちの館」に入ることができた。もちろん、肉親親族、友人に別れを告げ、身の整理をして全国に五十ある厚生労働省所管の「旅立ちの館」に向かう。財産は一千万以上は半分は国庫に入る仕組みだから、格差は正にも役だった。「旅立ちの館」では、清拭し、体調を整え、個室に入ると経口睡眠剤が投与される。そのままに眠るように事切れる。その後の葬儀は、本人の希望や肉親によ

って執り行われる。

(だが反対された)

中谷は少し唇を歪めた。長男も長女も元氣そのものの父親が自ら死を選ぶことには反対した。母親の分まで生きて、孫の結婚式にもでて欲しいという。それで断念したのだが、このところ急速に老化が進んでいる。認知症の疑いも少しでてきている。そうなる则ち安楽死は選べない。あくまで正常な本人の意志が必要だからである。

(チヂミだな)

中谷は自分の姿を想像した。認知症が進みだすと妄想が進む。物忘れから人忘れになるだけではない。心の貪瞋癡が出来事を人に結びつける。「財布がない」「泥棒が入った」「娘の婿が盗った」「食べさせてくれない」人間関係と社会関係の破壊は遠くから始まり、近くへと進行する。疑いたくない妻

や夫にまで進むことはない。心が拒否する。それは総てを忘れて昔のエピソード記憶に退避することによって達成される。娘の顔が亡くなった妻になり、時には母親になる。しかしそれでも生き続ける。生存欲の最後の砦は「食欲」である。動物としての基本である。人は、飲み食べることから肉体は自然に形成される。脳が創られ、身体の支配へと進む。その逆が起きる。身体は縮み、もともと完全ではない脳の支配から離れる。脳は退行し、生存本能はただ食欲だけを追求する。もはや排泄は関係ない。汚物は汚物と認識できない。自分の手足が自分から離れていく。我がものと考えていた肉体は縁によつて結ばれ囲い込まれていただけである。愚かさに蝕まれた心は、慈しみも悲しみも喜びも忘れ去り、貪りの波に翻弄されていく。

(いやだなあ……)

中谷はそうなる自分を思い描く。それを心配しても仕方がないことを悩む。

そういつた高齢者が溢れるまえに、国家が縮み治療を行う。心の葛藤は個人が解決するより仕方ないが、心と脳の支配から離れた肉体は、縮むことでバランスが取れる。日本の長寿医療から生まれた特効薬カンコイドエースとT1C複合剤。それは認知症の進み具合とあわせて肉体を縮小していく。最終的に赤ん坊サイズまでを目指している。残念ながらまだ百十数センチ二十キロ程度までしか小さくならない。六歳児程度の大きさである。だがそれでも高齢七百万人の認知症患者の負担を、三分の一に軽減した。体力的には衰えているうえに小さくなるので、食事も入浴も排泄も着替えも介護の手は入りやすい。スペースも大幅に節約できた。社会福祉関係予算は激減し、子どもや弱者に優

先的に配分できるようになった。

「旅立ちの館」に併設された「夢見る館」は正式には「高度養護老人ホーム」という。

中谷は、大きなため息を吐いた。心の中にため込んでいた生存欲という大きな塊が、部屋の中に吐きだされた。

（明日、役所に連絡して、準備をしよう。子どもたちにも話そう）

目に光りが灯った。

いままで生に執着をしているつもりはなかったが、結局そうであつたのかもしれない。

和室の仏壇に向かうと灯りをともした。

マイナンバーカードを仏壇に置き、線香をつけて、手を膝の上にゆつくりと落とした。妻のにこやかな写真を見つめた。心の中に刻み込んでおく。

「いくことにしたよ。チヂミ券だから少し時間はかかるけれどね」

小さな声が、妻の写真に吸い込まれていった。貪りも怒りも愚かさも心の中から追いだした。心がやすらぎに満たされ、その波動は小さな仏壇から、和室の中に広がり、やがてコンクリートのすき間から、時間と空間の中に静かに広がっていった。

了



個人番号カード  
〔総務省 HP より〕

う  
ふ  
ふ

うふふ

左斜め後ろから「うふふ」と押し殺したような笑い声がある。

振り向くと妻の敏江が、小さなつばのベージュ色のベルモードから顔を上げてにこりとしている。

「あ、あ……」

いつものことで、笑みを浮かべている理由はわかつている。私は言葉にならない返事をする。

「一郎さん、私に合わせて無理していない」

少し音が弾んで楽しそうだ。

「あ、いや」

私はふくらはぎに力を込めつつ頬を緩める。苦笑するしか術がない。

私の身長は若いときからいうと少し縮んで百六十九センチ。妻は百五十センチくらいである。普通に考えると当然歩幅が違うのだ。退職以来、週に二、三日、妻と歩く。せいぜい往復四キロほどだ。たいてい買物を兼ねてリュックスタイルである。

歩き出すと私は妻の歩幅に合わせてちよこまか歩きになつていくらしい。それで笑われるのだ。ところが確かめてみると、私の歩幅は身長わりに狭いのだ。だから意識して妻の歩くのに合わせているわけでもなさそうだ。しかし妻に「私に合わせていない？」といわれると、そんな気がしないでもない。すると私は突然大股にな

る。歩道の敷石を何枚ずつ一歩で進むと数えながら足を踏み出す。しかし長くは続かない。すぐに忘れてまたちよこまか歩きである。

（まあ、気楽に）

考え直して足の力を抜いて歩き出した。

「うふふ」

また妻の声が出た。

左後ろを振り返って立ち止まった。

初冬の日射しが路面を貫いている。

ギラギラと降りそそぐ光が私を叩き、想い出を沸騰させて幻影を見せたのだ。

（もういないんだ……）

臉が熱くなつて涙が溢れた。私より八つ下の五十九歳で逝つて半年になる。一年前に余命半年の末期の胆のうガンが見つかった。何も兆候はなかった。というより気づかなかつたのかも知れない。肝臓にまで転移して、化学療法は身体を痛めただけで効かず、慌ただしく妻は去つた。

（何もできなかったな）

入院は短期間で、治療のために四ヶ月ほど病院へ行き来した。点滴は火曜毎に二回、一週間空けてまた繰り返す。運動を兼ねて徒歩と電車。私が付き添い、帰宅はタクシーである。しかし次第に身体が弱つていった。

最後になった抗ガン剤シスプラチンの点滴の日、妻は「歩いて行く」という。普通、自宅から私鉄の駅まで十五分ほど歩いて乗車する。二駅目で下車すると北に八分ほどで新しくできた大病院に到着する。

だが、通常、上でも八千くらいという白血球値はこの日二万四千を超えていた。体調は良さそうだったが猛烈にしんどかつたに違いない。それでも妻は「歩く」といった。

どんよりした日が続いていたがこの日も細い雨と強い風である。四月の上旬、予報では冷えるらしい。

「雨も少し降っているし」

躊躇う私の言葉を妻は遮った。

「歩いて行く」

「腕につかまれよ」

右手で傘を差し、妻は私の左手にぶら下がるような格好で、そろそろと進んだ。妻の身体の重みを感じながら近くの公園の中を歩いた。雨に濡れた桜の花が満開であった。

もはや治療は無駄であった。ガン細胞が総ての臓器を食い尽くすのを見守るしかなかった。「自宅にいたい」と妻はいった。私は嬉しかった。私が同じ立場でも限界までは自宅にいたいに違いない。それに「自宅にいたい」というのは、私を少なくとも伴侶として信頼してくれていることでもある。

私はマンシヨンの和室に看護用電動ベッドを手配し、医師と看護師の往診を頼んだ。朝は抱き起こして、「僕の腰につかまれ」という。電車ごっこのようにサニタリーに向かう。トイレをすませると洗顔して、ヨーグルト

やリンゴやパンを食べさせる。コーヒーが好きだったのだが、嗜好が変わって避けるようになった。いろんな種類の紅茶をたくさん買い込んだ。冷たいアイスクリームは普段は買わないハーゲンダッツだ。イチゴも好きだった。夜は妻のベットの横に簡易ベッドを置いて眠る。時には添い寝もした。

だが自宅に帰ったときは起きていられた妻は、半月の間に介助がないと起きられなくなった。辛い痛みは麻薬系の薬で抑えられている。しかし膨れ上がるガン細胞が食道や胃を圧迫し、腹水が溜まっていた。

（でも寄り添えたな）

私は想い出に浸りながら鼻水をすすった。一生の間で最高に泣いた。誰に何といわれても構わなかった。高齢であつても涙と悲しみは溢れるほどある。

妻は次第に食べられなくなった。

パンはひとかけらになり、イチゴも一粒になった。

医師から紹介された高カロリー飲み物やゼリー状の物をたくさん用意した。シャーベット状にして食べさせる。やがてそれも次第に受けつけなくなっていた。アイスクリームや、果物ゼリーなども、一口二口だけになり、悪化する内臓の関係から氷を欲しがった。

（このままでは栄養が取れない…）

腹水は炎症を起こす内臓の膿でもある。

（一郎さん）

夜中に何度も妻の申し訳なさそうで、辛そうな声でした。

「ちよつとまつてな」

冷蔵庫の貯氷室に手をつ突つ込んだ。枕元に低い台を買つてそこに保温水筒を置いた。もはや妻は自分では氷を口に運ぶこともできなくなつていた。

そしてそれが私には苦痛になつた。

（僕の身体がぶつ壊れても）という意識の反面、情けないことに私は妻の立場より自分のしんどさに負けていた。しんどいなという気持ち心が心の片隅にとぐろを巻いていた。

（ごめんな）

自分を責めた。何度も何度も自分の心を叱つた、弱さを呪つた。（できないじゃないか）自分の弱さをあざ笑つた。

その日が来た。

ベッドから起こして休憩させる。抱き上げるようにしてつかまり立ちさせた。私の腰に手を回してサニタリーに向かつていた。その妻の手は膨れ上がるガンと、筋肉の衰えで私のバンドにやつとのことで届くだけになつていた。トイレから洗面台に移ると、おいてあるイスに腰掛けたまま、蛇口に手も伸ばせなくなり始めていた。

リビングの食卓に座つてもシャーベットをひとさじしか飲み込めなくなつた。

昼に、ついに妻は一口も食べられなくなつた。

テーブルに突っ伏した妻の肩に手をそつとおいた。総ての臓器が冒され、皮膚も新陳代謝ができないのか触れると痛いほど敏感になっている。

膝をついて妻の耳元に顔を寄せた。

唇をギョツとかみしめても涙が溢れた。私自身が荒い呼吸をしながら、ようやく吐き出した言葉は遠い世界の声のような気がした。

「もうこのままでは餓死やで、入院するで」

私は思いきつた。もう何もできない。衰弱していく彼女を見るのが辛くてたまらない。

妻はこくりと首を垂れた。

医師の指示で救急車を呼んだ。妻も私も生まれて初めての車、そして妻は二度と乗ることはないだろう。近くのホスピスの個室に入り、緩和ケアを受けた。点滴が入り、目を覚ますと意識はしつかりとしていた。

「軽い睡眠薬で、呼ぶと意識は戻ります」

私より若い白髪の医師はいう。ホスピスの他の部屋は恐らく八十代前後の方ばかりである。五十九歳という妻には早すぎた。

「お父さんをお願いね」

夜のホスピスで私のいないとき、息子達に頼んでいたという。

大型のトラックが私の横を通り過ぎ、片手でサファリハットを押さえて、危なく私は歩道の手すりにつかまっ

た。私は夢の世界を歩いていたらしい。

あふれ出た涙を眼鏡を外して拳で拭いた。

大きな息を吐いた。

頭が少し痛い。血管がどくどくと脈打っている気がする。もう数年来のことだ。一度検査をしたが異常はなかった。歳をとると身体の総てが減びに向かつていく。

車のない駐車場の歩道との境に設けられた高さ三十センチばかりのコンクリート塀に腰を降ろした。静かに目を閉じた。動悸がおさまって、私は深いため息をその場に落とした。神経質な私は何か別のもも落とした気がしたが、何も見当たらなかった。

立ち上がって、サファリハットをかぶりなおした。頭に透明感が戻ってきた。身体が軽くなった。

北へ向かう国道一七五号線沿いの歩道は狭いが、人がほとんどいないので歩きやすい。

自宅マンションから二キロほどのところに大型ショッピングセンターがあった。車でもよく来たが、真夏の日中以外は妻と歩いたものである。

歩きながら、この葬祭会館は、両親が世話になったとか、取り壊された場所に元は何があったのかとか、電信柱が邪魔だとか、雑草の勢いが凄いとか、会話の九割は私が口を開いていた。時にはイスラム国のニュースとか、或いはマンションの誰々さんの下世話なことにも飛ぶ。私の勝手なものいいにも妻は相づちを打ちつつ、ときに私の知らない世間話も披露してくれる。

（これからずっと独りだな）

すぐ近くには長男夫婦もいて、なにくれとなく心配してくれる。それだけでも感謝しないといけないのだ。  
（しかし、独りだな、確か、尾崎放哉という俳人が「咳をしても一人」といったな）

この自由律俳句には、人生をともしする人がいないというだけでなく、その情景におかしさを感じる諧謔味もあるらしい。私はまだその域ではない。いずれそうなるかも知れない。刻の流れが結晶となり、想い出を閉じ込めて心を解放してくれるかも知れない。そうすればたとい僅かな残りの人生の時間であつても新たな異性や伴侶を求める気持ち立ち上がるかも知れない。

だがいまは、心を締め上げるような孤独感だけである。

親友の寺の和尚は「所詮人は独り」というが、ブツダは本当にそういわれたのか。そんな諦観は認めたくなかった。いのちは永劫に続いていくのだという願望と、いつまでも妻とともにありたいという思いが固く心の中に広がっている。

人は独りだが、一人では生きられないのも事実である。人間関係の中に「我」は存在する。

（妻が旅立ったいまは、その人間関係の根っこが揺らいでいるのだ…）

苦勞した母を亡くしたときは、ただ悲しかった。酒乱でDVだった父を随分憎んだが、その父が母に遅れて亡くなった日は、葬祭会館で大泣きしてしまった。だが、ともに八十歳をこえていた両親を見送った心には、悲しみと同時に順当な死に対する満足感も屈み込んでいた。

（生まれるのも独り、死ぬのも独り）

そういういきかせても孤独感が押し寄せてきては打ち返していく。五十九歳で逝った妻のその重さは心を空虚にしていく。

三十五年間連れ添った。失つてみてその喪失感の大きさに打ちのめされている。夫婦のことをベターハーフというが、まさにより良き半分であつた。私は心の半分を失つたのである。

「死にたいな……」

言葉が口の端から漏れ出た。

「うふふ」

妻の声でした。

振り向くと、妻がいた。

小さなつばのベージュ色ベルモード。その下から敏江の顔がのぞいている。

「うふふ」

耳朵が震えた。

「あ、ああ」

口から飛び出た言葉が、陽光に打ち砕かれて粉々になりつつ、光りの粒となつて消えていった。

駐車場の塀に沿った幅が一メートルほどの歩道にはただ初冬の空気が渦巻いているに過ぎない。

妻は眠りについてそのまま逝ったが、その直前まで意識はあつた。ホスピスの個室で「僕は幸せだったよ」といふと、ほとんど声の出ない口を動かして「わ・た・し・あ・わ・せ」と微かに呟いた。私はその時、一緒に死んでもいいと思つた。死ぬことは怖くはなかつた。取り残されることを恐れた。空間と時間を共有し、子育てをして人生の中核をと共に過ごした三十五年間の時空の重み。夫婦という人類が生き続けるための形態。それはごく自然なこと、否定も肯定も超えた世界。

（僕も幸せだった。それはきみと巡り会つたこと）

三十二歳の私は、見合いで八歳年下の妻と結婚した。小太りで黒縁眼鏡を掛けた魅力のない男性の何処がよかつたのか。妻は後に、「見合いしたけれど真面目だけの面白みのない人だ」と母や叔母に相談したという。すると「真面目が一番やないの」と叱られたらしい。結婚してみると親父ギャグを飛ばし、テレビゲームに夢中になり、映画が好きで、童話や小説なども書く変な男性であつた。

「不思議な縁だったなあ」

私は一人でニヤリとした。見ている人がいたら氣味悪がつたかも知れない。仕事が激烈で同僚とよく飲み歩いた。肉体関係まではいかなかったが浮気のようなこともした。妻にないものを求めて目の前の妻の素晴らしさがわからなくて彼女を悲しませた。悔悟の念が起きる。しかし、自分勝手といわれようと結局、私は一人の女性を生涯愛し続けたのだ。そのことに嘘はない。妻がタレントの郷ひろみが好きだときくと、軽い嫉妬も覚えていた。

私は自分の心を思い起こして苦笑した。

嫉妬など女性の専売特許のようだが、心理学者によると男性の嫉妬の方が遙かに凄いらしい。

妻を亡くしてみても、私の心が彼女の心としっかり結びついていたことがわかる。そしてその心はいのちの結びつきでもある。

死は再生への輪廻転生の入り口。ブッダは死後について答えなかつたが、それは否定ではない。「不知」であつた。合理的思考からは「知らない」である。死後はないと断言されているわけではない。あるかないかは形而上学的な議論になる。ただ、ブッダの生き方が死後の生について語っていた。

悟りを得たブッダは、この教えは人びとに難しすぎるのでそのまま去ろうとしたという。「去らずにどうか慈悲の心で教えて欲しい」とそれを押しとどめた逸話が「梵天勸請」である。ブッダはその後、四十五年間の流浪の旅をされた。仏教僧団、サンガは様々な問題を抱えて大きくなり、時には提婆達多によつて危機を迎えたようなこともあつた。そのブッダの最後は壮絶である。鍛冶工のチュンダに供養されたたぶんキノコ料理と推察される食事によつて中毒となり、鮮血が迸る凄まじい苦痛の中で迎えられた。その苦しみの中でさえ、チュンダを責めてはならないと慈悲の心を示されている。確かに「慈」は仏教の核だ。だがブッダは悟られて解脱された中で生きられた。解脱が死を意味するなら極端な二ヒリズムに陥る。総てのものは無常であり、無駄なのだ。そのことを説くのに長い一生を費やされたのだろうか。違ふであろう。総ては無常であるが縁によつて生滅する。その縁は心の力による業によつて決定する。つまり解脱とはその心もて善く生きることではないのか。

多くの弟子がいた。舍利弗が亡くなったときブッダは涙を流されたという。人として慈しみ、悲しみ、喜び、しかもそれにとらわれないで善く生きることが悟り。それはいのちに刻まれ、いのちは無数の縁によつて再生する。だが「無我」といわれる固有の「我」は存在しない。いのちは「非我」である。「非我」の「我」は縁起によつて永劫に流転する。「我」に執着しない「非我という我」こそ来世に繋がるいのちである。私はいまそう信じ始めている。

妻は亡くなる前夜、息子達と私をしつかり認識し、未明にベッドサイドにいる私の横で旅立つた。

（また会おうな）

私の内心の言葉は、会いたいなという願望だったかも知れない。しかし一個の人間のいのちもまた全宇宙そのもののいのちを構成する要素。そのつながりを感じていたのだと思う。

私は死にたかったが、それは善く生きることに対する。手段もない。まして現実には息子や孫に迷惑を掛ける。

（なあに、僕はもう六十八歳になったぞ、うまく生きて十数年頑張ればいい）

そんな時間は永劫のいのちからして刹那にもならない。一つの大宇宙がビッグバンから減ぶまでを仏教では一劫ともいう。一劫はある説では二兆年だそうだ。そんな大宇宙が泡のように無数に存在し生成消滅して続いていく。その本体は無数の生きとし生けるもの「非我の我」である。それは縁によつて六十兆の細胞と一千兆の細菌類が構成する一個の人体ともなる。

私はアンパンマンのやなせたかしが亡くなった後、偲ぶ会で配られた彼の詩を思い出した。

ぼくは

小さな

雲だから

風にふかれて

とぶだけさ

さよなら

またどこかで

お眼にかかりましょう

大空にそのときどきの気象条件によつてわき出る雲は一つひとつが微妙に異なる。生成して消滅してもそれは大気に、自然界に溶け込んだだけで再び条件が整えば姿を現す。風に吹かれて飛び散つても、消え去つた訳ではない。人のいのちもまた千兆の細胞や細菌類が縁によつて集まり形成する。その縁はいのちの刻む善悪の業の力で回転していく。

（生々流転か…）

私は横山大観の墨絵の山川の流れと雲や霧のたなびきを頭に浮かべた。

鋭い日射しの歩道を歩んでいるはずが、広大な山々の間、ヒンヤリとした冷涼な大気の中を、ゆつたりと流れていく霞のようになった感覚であった。

（いのちの海に漂っている）

頭脳の芯が思考を超えた心にバトンタッチしたようであった。

「うふふ、そうね」

妻の声が霞を震わせた。

私の心臓がどくんとなつて、現実引き戻された。

一七五号線沿いの歩道は五十センチほどの溝の上のコンクリートの敷石だけから、幅が四メートルはあろうかと思われる歩道になり、その向こうに新しいショッピングセンターが姿を現し始めていた。

（幻聴か……）

そう思いながらも私は左後ろを振り向いた。

日射しが無数の矢となつて降りそいでいるだけである。

（いかなあ、寝不足か。敏江が心配するだろう……）

その私の思いがキュツと音を立てて縮み込んだ。

小さなつばのベージュ色ベルモード。妻の帽子が落ちている。

私の目は確かにそれを捉えている。乾いた唇をかみしめて目をしばたいた。

(ばかな……)

妻の衣類は亡くなつてすぐに業者に引き取つてもらつてゐる。帽子は二つくらいあつたはずだが、もうウォークインクローゼットには何一つ残つていない。

私はしばらく息をするのを忘れたようにベルモードを見つめていた。帽子はまるで誰かがそつと地面に置いたかのように端然としてゐる。

妻はもともと小顔なので小さなつばの帽子ならばよく似合う。大きなつばにすると、背が高くないので帽子に負けてしまうのである。

その妻にあわせて私の帽子を買つた。私は顔が大きいので帽子は適していないのだが、このサファリハットはなんとか様になつてゐる。

(誰かが落としたのだろう)

私は貧弱な頭脳を総動員して合理的に考えてみることにした。だいいち、妻の敏江が亡くなつたのは半年以上も前である。

私は自分の愚かさをあざ笑うかのように首を捻つて、帽子に手を伸ばした。ベージュ色が微かに日焼けしている。つばを持つて拾い上げると土埃を払おうとした。

今度は私の心臓がのど元までせり上がつてきた。

(T・Tだと：)

帽子の内側の小さな布タグにT・Tと書かれている。妻のイニシャルである、竹内敏江。

(まあ、武田でも多田でも、名前が俊子でも智子でも同じことだ：)

自分を納得させようとして、タグを裏返した。「2013/3/26」の文字がある。私が書いた文字だ。購入月日がよくわかるように、見えない部分に書き込むのは私の習いなのだ。

心臓が猛烈に鳴り始めた。

頭の中が混乱し始めている。科学的な合理性と積み立てた知識がひび割れ崩れ始めていた。人類が知見した世界や知識など宇宙的なスケールから見ればたかが知れている。その知見さえ私の頭の中には億兆分の一しか詰まっていない。しかし頭脳と身体によって支えられているいのちの心はしんと静まり、何かの予徴をじっと待っているようであつた。

何故、半年前に旅立った妻の帽子が、私の目の前に落ちていているのだ。私は幻影を見ているのかも知れなかつた。帽子を持ったまま、私は顔を上げると辺りを見回した。

新しいショッピングセンターは高い工事前の壁の向こうに薄茶色の姿を現し始めている。

すぐ前を、腰を曲げた老婆が、カートを引きながら歩いている。歩いてきた遙か向こうの赤信号に、立ち止まっている男性がいる。

私は深い吐息をついて、帽子を持ったままショッピングセンター前のバス停に向うことにした。そこで完成予

定の書いてある看板でも見て、一息入れて引き返す。

(この帽子はなんだ…)

リュックを揺すり上げると、右手を見た。そこにはシミの浮き出た老人の手だけがある。

「うふふ」

左斜め後ろから妻の声がした。

振り返ると、私が掴んだはずの小さなつばのベージュ色ベルモードを被った彼女が微笑んでいる。

「うふふ」

彼女は小さな唇をあけて白い歯を見せている。

(ばかな…)

私は自分の右手を眺め、確かに掴んでいたはずの帽子がないのを確かめ、再び彼女を見た。

「似合う」

彼女はそう訊いた。

(あ、ああ…)

この小さなつばのベルモードは、彼女によく似合っていた。だが、私は「よく似合うよ」とはいつたことがなかった。考えてみれば、私は人として大切なことに不器用であつた。不誠実であつたのかも知れない。

男は仕事をきちんとすること、家族を養っていればそれでいい、という言葉を鵜呑みにしていた。子どもの風

呂入れや、ゴミ出し、夏休みの旅行が十分な家事分担と考えていた。その方が都合がよかった。仕事の愚痴や、政治の話や映画の感想や、イスラム国への怒りや、橋下大阪市長の話はしたが、彼女の生活の話はしなかった。料理が旨いとも不味いともいわず、洋服が似合っているともいわなかった。髪を切ったことさえわかっていなかった。目から入る情報は確かに妻の髪が短くなったことを捉えていた。だがそれは微かに私の心に届いただけで、「気づかず」それを捉えて彼女に返すことはしなかった。

（妻の目をじつと見たことさえ…）

彼女を見つめて、優しい言葉も、慈しみの言葉も、愛の言葉も囁いたことはなかった。

いつも傍にるのが当たりまえ、世話してもらうのは当然。そんなことはいわずともわかっているという思い込み、傲慢。それは恥ずかしさの影に隠れてもいた。同時に口から出てしまえば自分の心や行動が縛られるのを恐れていたのかも知れない。また優しさの語を話せない無知や無能力、センスのなさを誤魔化せる効用もあつたに違いない。しかし、人と人のつながりの基本は言葉と態度である。目を見つめる嫺やかな愛の顔、穏やかに語る慈しみの愛の言葉。「愛顔」や「愛語」は、誰にでもできる。地位も財産もいらない。

その一言が出せない愚かな男であつた。

私は彼女を見つめたまま、胸の底から、心の深奥から言葉を絞りだした。

「ああ、とても素敵だよ、可愛いよ」

涙がどつとあふれ出て、「ありがとう」という妻の言葉が涙の中に溶け込んで、身体の細胞に染み込んでいっ

た。私の心は嬉しさに泣いていた。

「ごめんな。ぼくは心の奥ではわかっていなかった…」

私はそう思った。心の奥で本当にわかっていたのか。例えばその思いがあつたとしても、それに気づいていなかったのではないか。自己本位で、何かあるとすぐに他人のせいになろうとした。

「いいのよ」

彼女の言葉が耳に届いた。そしてふつと目の前から妻は消えた。

「敏江…」

チリのような日の光の中で、私は佇んでいた。風景が消えて、幻の中に妻の姿を探した。

「うふふ」

彼女が私の左にいた。右腕を絡ませて、私を見上げていた。

「いたのか、本当にいるのか」

「ええ、あるきましょう。私に合わせてね」

小さなつばのページュ色ベルモード。「これがいいよ」と数少なく私がいつて選んだ麗しのベルモード。そこからぞく彼女の瞳を見つめてから、私はゆつくりと頭を上げた。

見たこともないほどの無数のきらめきが満ちた空間が、私の前に広がっている。足下には銀砂のような一筋の道。

「無理しないでね」

「あ、ああ」

私は大股になってゆつくりと歩み出しながら訊ねた。

「ここは」

「いのちの海。縁生の海。一郎さんと私が再びであう世界への道」

「そうか」

私は私を形作っていた肉体が減び、閉じ込められていた心が躍り出ているのを感じていた。たぶん、あの歩道上で頭が痛かったときに、私の現生は終わったのであろう。「非我の我」であるいのちの傾向性を持った心は、縁によつてつながれた妻と再びの輪廻に向かつていくのである。慈しみ、美しきもの、優しきもの、喜ばしきもの、感動に満ちたもの、知ることの楽しみ、愛する素晴らしさに生きる、その繰り返し「解脱」した輪廻に違いがない。

「また、きみと」

「ええ、姿形は違っているでしょう」

「いいさ、きみに出逢えれば」

「うふふ、うれしい。し・あ・わ・せ」

私の歩幅はまた妻にあわせ始めていた。

「うふふ」

言霊がいのちの心の中に秘やかに染みいった。



了

ジ  
バ  
サ  
ン  
ビ  
ル

ジバサンビル

目玉が縮む。

そんなこともあるのかと深山修は佐々木恭吾のシミだらけの顔を見つめた。壁際の長椅子には三人しか座っていない。もう一人の七十歳にしては血色の良すぎる顔色をした吉田瑞穂も耳を傾けている。

低いモーター音と、プールの水がたてる振動が広い室内を満たしている。

会話は相当大声だが、長椅子周辺だけに閉じ込められ、壁と水に跳ね返されて妙にくぐもって聞こえる。

「眼球がな、縮む。それで、眼球を包んでいた薄い膜がちぎれて網膜にひつくらしい」深山修は佐々木恭吾の干からびた口元を眺めている。想像してみよ

うとしたが、浮かんでくるのは理科図鑑で見た目玉の構造だった。

水から上がって十五分足らずだが、佐々木の皮膚のたるんだ筋肉質の大きな身体も、深山修の腹の出たなまっ白い皮膚も、色が黒く体毛の濃い吉田瑞穂の手足もすっかり乾ききっている。

「ひつついた薄い膜が、伸びたり縮んだりして網膜を引くから、映る像が歪む。ほら、よく格子状の線が引いてあつて、線が歪みませんかという眼科の広告があるだろ」佐々木は、深山と吉田の顔を交互に見ながら得意げに話す。

歳をとると健康の話題は生き甲斐である。体験でも伝聞でも、目新しくなくともみんな耳を傾ける。それで自分の身体が他人に比べて僅かでもましであると侘しい優越感に浸る。

(生存欲か…)

深山修は友人の評論家である阿倍野から聞いたことを思い出した。生きていくことの辛さは総てそこから来ているという。貪りや怒りや愚かさも、心の底の「生きたい」という欲望が原因であるらしい。かといってそれを捨てれば死ぬしかない。

佐々木恭吾はその目玉縮みで来月くらいに手術を受ける。目玉縮みは誰でも起こる事だというが、膜が残つて網膜にいたずらするケースはそんなに多くはないらしい。

「白内障もな一緒に手術する」佐々木は手術の「しゅ」と「じゅつ」をいいにくそうに、区切つてゆつくりと発音した。

白内障なら深山は六十五歳の時に手術を受けていた。麻酔のおかげで痛みも何もなかった。目玉に針が刺さるのが見えるのは少しぞつとしたが、手術室に入つて出するのに十分しかかからなかった。朝、

病院に行つて検査して、昼前に水晶体を切り開いて中身を吸いだし、眼内レンズを入れた。二時間ほど安静にしていたが、夕方には家に帰つていた。四十万円の保険のきかないレンズがあると聞いていたな、と妙な事を思い出した。累進焦点レンズとかで、眼と同じように何処にでも焦点が合う。もつとも白内障の場合、殆どは保険の利く固定焦点レンズらしい。医者自身が笑いながら「こんなものもありますよ」と一応の説明をしていた。金のある連中はこのごろは新しい完全な目も手にはいるらしい。深山は前倒しの年金暮らしに入つて十年以上経つ。七十四歳である。退職金を足して暮らしてきたが、それももう三分の二はなくなっている。但し、七十七歳前後辺りから社会活動の量も質もがぐんと落ちた。三つ下の妻も同じである。食欲も欲しいものもあまりない。金は少しは二人の娘夫婦に残して

やりたい気もあつた。しかしそれも最近どうでもよくなりつつある。所詮すぐに忘れ去られるのだ。

「ほら、お姫様来るぞ」

佐々木の話が一段落すると、吉田がてらてら光る額をプール入り口に向けた。このスポーツ総合ビルではシャワー通路を通つてプールに入る。足首まである消毒液の中を歩いてくる。頭上からは滝のように生ぬるいシャワーが降り注いでいて、ここでゆつくりと局部まで清潔にしてくる仕組みだ。だが、カラスの行水ではないが、まるで濡れるのを恐れるように駆け抜けるものが多い。

その通路から、若々しい皮膚が姿を現した。すらりとしているが、身体にフィットしたオレンジ色のワシピース型の水着がはち切れそうである。

深山達がお姫様と呼ぶのは、幸田綾子という六十代半ば過ぎの女性である。よく見ると年齢相応

の雰囲気はあるが、七十代以上の多いこの室内プールでは目を引く。

「さあ、もうひと泳ぎ」

佐々木恭吾の声につられて吉田瑞穂も深山修も長椅子から腰を上げた。ひと泳ぎといったところで、水の中を歩くだけだ。吉田瑞穂は時折、背泳を披露することがある。中学時代に水泳部にいたので見事なものだが、それでも彼より一回りほど下の六十代の若者が泳ぎ出すと、そつと抜け出す。

三人は、プールにつかると歩き出した。幸田綾子が、仲間の老婆達と歩き出す。みんな水泳帽をかぶり、黄色や赤色、鮮やかな緑といった水着を身につけているので、遠目には若い女性のグループと見えぬ事もない。

「やあ、こんにち」佐々木は、早速、幸田綾子に声をかけた。彼には連れ合いがいるが赤の他人が同居

しているといった感じと聞いている。もちろんもう性欲があるわけではないが関心は衰えないと見える。食欲と広い意味での異性への関心という性欲は最後まで衰えないと阿倍野は穏やかに笑いながらいつていた。ただ深山修など、食欲は無理に食べているという感じである。「食べないと死ぬからな」と思う。案外絶食して水だけで衰弱死というのもできそうな気がする。異性への関心がないこともないが、気の置けない同性仲間という方がいい。なにより恋愛結婚をした妻がいる。途中でふらふらとしたこともあったが、結局、妻が一番である。深山はそれでも今回の人生は充分であつた。

ウォーキングコースから外れて、佐々木は幸田綾子とたわいない世間話をしている。男性はこの手の話題は苦手だが、彼は天性のものがあるらしい。いつも通り深山と吉田もコースから外れて黙つて拝

聴している。話題に入るには流行のテレビドラマや、ゴシップや買い物情報、ご近所伝聞に精通しないといけない。

お姫様の幸田綾子にはこにこしている。高齢者とはいえ元氣な男性三人に囲まれるのは悪くないだろう。同性の女性達から羨望の眼差しが向けられるのにもご満悦だ。妬みの悪口はさらりと受け流す。他の女性達は「どうぞこちらへ」と誘われても加わる勇氣がない。幸田の魅力にかなわない彼女の睨みもある。加わつたところで、男性達は愛想笑いをしてたちまちブルウォーキングを始めてしまう。

彼らはほぼ毎日十時頃には現れて、たまにはマシ室も利用して、サウナに入つて、露天風呂につかり、レストルームで休む。食事をしてから隣接のショッピングモールによってから帰る。コナンスポーツ

ジムはこれで月六千四百円だから、毎日銭湯に通うより安い。

二人の話が終わると、三人はウォーキングコースに戻って歩き出す。深山のヘソ下辺りまである水の抵抗は大きく、力を込めると、身体の内部分火照り出すのが判る。幸田綾子は女性グループに入って、賑やかに話しながら歩いている。時折誰かの視線が深山達三人に向けられるのは、幸田綾子の話が彼らのことになっているからだ。佐々木は深山や吉田のこともよく話す。特に吉田が独身なのは気を引くようである。当の本人は悪い気はしないらしいが、「なんだかなあ」という感じであるという。

小一時間歩くと、三人はプールから上がる。マシンや風呂で、或いはレストルームで一緒に行動することもある。ただ声をかけない限りあとはバラバラのことが多い。互いの家庭のこと話すが、家族と

会ったことも、どこに住んでいるかも詳しくは知らない。今まで歩んできた人生はそれぞれだし、親交が深まり相手の欠点が目につき出すと互いの気持ちは離れるかも知れない。毎日、核となるプールの時間とジムでの行動、たまの会食でいどに押さえておくのがベストなのだ。佐々木は深山や吉田を誘いたいそぶりを見せることがある。深山は避けている。ここだけの関係で距離を置いてつきあうには悪い男ではないが、やや自己中心である。もう嫌な気持ちにはなりたくない。

「じゃあ、お先」湯船から深山は立ち上がった。

「あ、それじゃあまた」大きな欠伸をしながら佐々木はいった。吉田は目を閉じたまま湯から片手を出してあげて見せた。

それから二週間、佐々木は姿を見せなかった。彼がいないと幸田綾子とも軽く挨拶する程度である。

「どうしたかな」吉田がプールの中で首を捻る。いままで旅に出たり、風邪を引いたり、所用で来ないのは長くても一週間である。まるまる二週間佐々木が姿を見せないのは珍しかった。

「目の手術はだいぶ先だしな」吉田が返事をせかせる。

「さあ」深山は曖昧に答えながらひよつとすると、と思った。不謹慎な想像だが、この歳になれば相身互いである。吉田の色の黒い顔の目も不安げに瞬いている。

「電話してみるか」

どちらともなく呟いて、結局深山の役割になった。

ガラパゴス携帯の奥から、声が響いたとき深山は一瞬、佐々木恭吾だと思った。名前と関係を名乗ると「息子です」と返ってきた。話を聞きながら深

山は吉田瑞穂を見た。そして「そのとおり」と頷いた。十日前に肺炎で旅立ったという。もうろうとした意識の中で「コナンスポーツ」と微かに話したらしい。

「ここはジバサンビルなものな」

電話を切ってから吉田が深山にでもなくいった。スポーツジムと叫ぶ実際はジジとババが低料金で健康に過ごせる施設である。いわば姥捨て山かもしれない。

「ジバサンビルか」深山が繰り返した。

「ああ、ジジとババの集うジバサンビル」

「ビルの中の歩くプールは、さしづめ三途の川だな」  
「そうだな」吉田がニヤリとした。年寄りばかりがぞろぞろと着衣を剥がれて進んでいく。

「極楽は」

「さあ、佐々木は充分に川を渡ったが、さて何処に

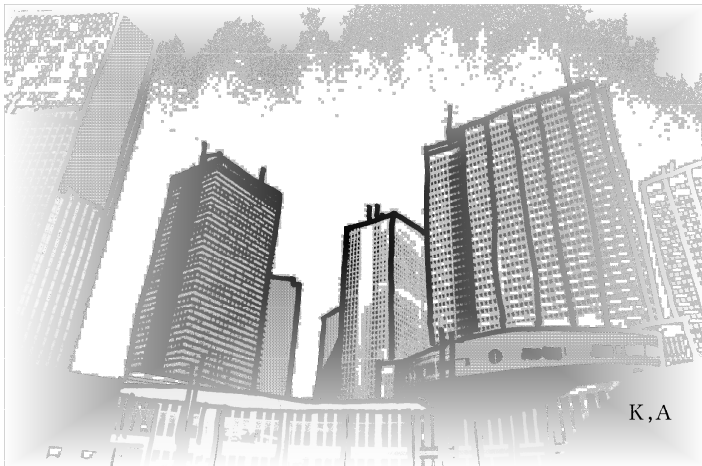
行ったか」

「俺たちは川の途中か」

「かもな」

深山は吉田の瞳を見てそれがまんざら冗談でもない気がして、大きな息を吐いた。

了



あとがき

はじめの三編は、第一回の藤本義一文学賞に応募したもので、慌ただしく書き進んだ。表題作「冥土問答」は、文芸誌『アクトス』で文明対談が連載されている。その影響で、このような形式も面白いのではないかと創作した。「老残チヂミ券」はSF、「うふふ」は情感世界である。三編で一つのテーマ、人生の終断について書いた。「ジバサンビル」は平成27年6月30日発行の『半どん』<sup>164</sup>号に掲載されたものである。実際にスポーツクラブ利用者の四割以上は高齢者らしい。SFの世界では増えすぎた人口を養うために老人達が苦痛のない死を与えられ、分子レベルの食糧になるという恐ろしい話などもある。人間とはなんだろうか、何故生きているのか。馬齢を重ね68歳になった。妻が逝って残された生は未来である。仏法の教えを身語意で読み、善く生きて、去りたい。【石川希理】

# 解説

同人誌の増刊で自分の短編をまとめるという。僅かでも人の心に何かを残し、作品は形にして国会図書館におさめる。執着はしないが前向きに励みたいという。私と『アクトス』誌上で対談を続けておられる。その縁で「申し訳ないが解説をお願いしたい」と依頼があつた。

三十枚前後の作品である。著者には『エスプラネード』という文庫本がある。タイトルになっている「エスプラネード」はやや長いが、やはり短編集だ。「長いのもいま書いています」と著者はいう。このところ「こんなこと書

いて」といわれるようなことを、うまく包み込んで書きたいらしい。そういえば「小泉孝太郎の決断」という著者の短編がある。SF。小泉孝太郎は誰かのような名前だ。彼が日本のトップになり、アメリカはヒラリー大統領と近未来の話である。経済力も落ち行き詰まった日本を、天皇制という国体を維持しつつ、アメリカの州の一つにするという。執務室での短いお話。まあ驚天動地のストーリーだが、ひよつとするとという感じがしないでもない。

人間の一生は短いし、人類という種の時代も、地球や、まして宇宙から見るとほんの一瞬かも知れない。終末論者ではないが、物質文明・技術の発展と人類の心の懈怠をみるとそのアンバランスが急速に拡大しつつある気がする。

そういう状況の中でこそ経験的実存としての個人の生は貴重なものであるし、歳を経た個体の思考は、後の世代へ引き継がれていかねばならない。その意味では彼の創作欲は必然的なことである。私からすると羨ましい限りである。伴侶を失われたが、「エスプラネード」の新聞選評を書かれた作家の野元正先生や、彼が童話で第一回明石市文芸祭市長賞をとったときの選者、童話作家で星陵高校の先輩である高濱直子先生などとも時にはお会いになるらしい。よき先輩や、同人仲間の小説の書き手、高阪博一氏、塩見伸介氏らとともに、互いに影響を与えて、更に良い作品が、彼のみならず『アクトス』から生まれることを祈っている。

「阿倍野友之」

# つれあい詩史

・大西敏江(旧姓 寺崎) 神戸市在住

1955年(昭和30年)12月26日生 羊座 O型

父・寺崎榮 母・寺崎キミ

姉・寺崎直美 兄・寺崎素道

大阪音楽大学短期大学部卒

・大西亥一郎 神戸市在住

1947年(昭和22年)9月24日生 天秤座 A型

父・大西正夫 母・大西和子

弟・大西啓造

1975年(昭和50年)神戸学院大学法学部卒

◇亥一郎、1975年(昭和50年)明石市立望海中学校教員・1979年(昭和54年)兵庫県学校厚生会「ひょうごの童話」入選、以後、1981年(昭和56年)より、小学館「わが子に贈る創作童話」優秀賞・サンリオ『詩とメルヘン』創作短編メルヘン入選・小学館「わが子に贈る創作童話」優秀賞再度受賞・1984年(昭和59年)日本童話会新人

奨励賞受賞・明石市文芸祭小説市長賞・同児童文学部門市長賞など創作活動

1980年3月26日(昭和55年) 見合い結婚 (長田の平安閣) 北九州に新婚旅行 亥一郎32歳

・敏江24歳 同年11月11日 長男・浩一郎誕生(明石市民病院)

1983 年9月27日(昭和58年) 次男・佑次郎誕生(静岡の病院)

◇ 亥一郎、1985年4月朝霧中学校に異動・1992年県教委指導主事(県立こどもの館児童指導専門員)に異動

1995 年(平成7年)1月17日 阪神淡路大震災 オウム真理教事件(地下鉄サリン)

◇ 亥一郎、1995年(平成7年)4月兵庫県立図書館調査専門員に異動・48歳(敏江40歳)・1996年(平成8年)2月23日、胃ガンで幽門部3分の2切除(県立成人病センター)「現・がんセンター」・1999年半どん文化賞(及川記念賞)受賞・2001年(平成13年)明石市人権推進室啓発教育課に異動

2001 年(平成13年)9・11米・同時多発テロ・(同年7月明石歩道橋事故発生)・翌年イラク侵攻

2002 年(平成14年)妻とグアムへ。翌2003年香港・マカオ、2005年イタリア、2006年アメリカ、2007年ドイツ・ス

イス・フランスと北京、その後韓国、トルコと8ヶ国を妻・敏江と旅行(各旅行記執筆)

◇ 亥一郎、2004年(平成16年)明石市立衣川中学校校長に異動 2008年(平成20年)文藝集団『アクトス』設立

2009 年(平成21年)1・1長男・浩一郎、細井亮子「1981年(昭和56年)1月2日鳥取県境港市生。父、

徹二。母、明子。(兄、周作。妹、悠子)」と結婚・現在(2015年)、陽菜子と慶の子どもがいる。

2009年(平成21年)8・6次男・佑次郎、稲井典子「1983年8月6日徳島県生。父、稔。母、もえぎ。(姉、

容子。姉、光代)」と結婚・現在(2015年)、燎・明煉・炉采の子どもがいる

◇亥一郎、2010年姫路日ノ本短期大学非常勤講師を経て准教授(児童文学・国語)・現在(2015年)梅花女子大学非常勤講師(詩と短歌)

2010年(平成22年)6月ハヤブサ地球へ帰還

2011年(平成23年)3・11東日本大震災(津波・原発メルトダウン)

◇亥一郎、2013年12月短編小説集『エスブラネード』・コシーナ文庫。翌年7月自選童話集『天然知能水』・風詠社文庫発刊「ペンネームは石川希理」・2014年(平成26年9月)佛教大学佛教学部卒

◇敏江、2014年10月4日「大西敏江マリンバ教室発表会」大久保『青空堂』・2015年(平成27年)5月8日永眠※結婚以来、自宅は現在地。613号から614号に移っている。※作成した冊子末尾に空白ができ、歩みを記載し

た。退職後、多くの方のご尽力で「子どもに与える絵本おはなし」とか「自分史」「人権」とかいう演題で講演会活動をしてきた。有り難いことに好評で、今年9月の西明石「はなぞの広場」で92回になった。



石川 希理

いしかわ きり

1947-2047

神戸市生まれ。梅花女子大学非常勤講師

日本児童文学者協会会員

文芸同人誌「アクトス」代表・編集者

◆半どん文化賞・日本童話会新人奨励賞

◆文庫『エスプラネード』・文庫『一本 500  
00円 天然知能水』（アマゾンで発売中）

総合文藝誌

**アクトス** 臨時増刊号

第7巻第5号・通巻第34号

冥土問答

平成27年11月8日 第1刷 発行

著 者 石川希理 [頒価]500円（送料別）

発行者 大西玄一郎 （送料込680円）

発行所 〒673-0031

兵庫県明石市宮の上1-17-614

大西方 アクトス編集室

電話（FAX兼）078（922）4562

メール ninjinjin@nifty.com

## 文芸集団 Actos2008

文筆活動へのお誘い

### § 趣旨

文藝のよりよい創作活動と鑑賞をととして「和」の人間集団でありたい。

### § 活動

『アクトス誌』年4回発刊[各1部を送付]  
奇数月に合評会・親睦会など



### § 会費

- ・年12000円(3月末までに一括郵便払込)・その他費用、なし。但し合評会出席時500円必要
- ※学生会員は半額
- ・会費払込の無い場合退会。返金等なし

### § 同人(創作希望)になるには §

- ① 資格なし、創作ジャンル自由、下記宛てに申込
- ② デジタルデータ作成・ネット送付必須

連絡先 〒673-0031 明石市宮の上1-17-614  
大西方 アクトス編集室

Tel&Fax078-922-4562 actos2008@mbe.nifty.com

◆HPをご覧ください。掲示板もあります。

<http://actos2008.o.oo7.jp/>(「文芸□アクトス」で検索)

◆奇数月第3土曜日午後。西明石(サンライフ明石)で例会。参加は自由

### § ご支援下さい §

**読書会員(支援会員)制度。**ご連絡下さい。

[年会費は2400円]

※年4冊のアクトス誌と臨時増刊号などをお送り致します。

※懇親会など参加いただけます。またアクトス通信に「おたより」「感想」もお寄せ下さい。

風詠社文庫 [自選童話集]

一本50,000円

## 天然知能水

石川希理著

平成26年7月7日 風詠社発行 648円 + 税

ISBN 978-4-434-19464-1 C0093

お近くの書店からご注文下さい。

※ネットの「アマゾン」・「紀伊國屋」・「7ネット」などでも入手可。

収録作選評(抄)「そばづえ」メルヘンとしては珍しいS・Fタッチのもので、星新一の系統に属するものです。このまま、短篇漫画のストーリーになりそうですが、人間の未来を予見するようなところもあり、まだぼくらはいろんな意味で「そばづえ」をくうことが多いので、身につまされる現実感がある。

漫画家 やなせ・たかし

コシーナ文庫 [短編小説集]

## エスプラネード

石川希理著

平成25年12月1日 コシーナブックス 645円 + 税

ISBN 978-4-904620-15-1 C0193

ネットの「アマゾン」からご注文下さい。

[エスプラネード]

独特の設定、構成で描かれた巧みな作品だ。短編小説は主人公の視点で書くのが常道だが、軽い認知症を疑われる主人公「私」は、意図的ではあるが、容易に昔の憎き上司の視点になったりもできる。

自宅から約4キロにわたる、過去にまつわるエスプラネード(遊歩道)で回想にふけり、亡くなったはずの妻が時々現れて会話を交わすなど、多様な幻影を見ながら何かおかしいと思いつつ歩く。その道は(ま、しゃあないか)と生きた私の、人生のエスプラネードでもあるという。そして意外な結末で終わる一。諦めを感じる人生をセミドキュメンタリー風の手法で描いた秀逸な作品だ。

野元正・作家 [神戸新聞書評・2013年3月30日]